

民国期の中国人は「日本軍閥」 という概念をどのように認識したか

陳紅民¹（浙江大学）

原文は日本語。翻訳：江永博

日本軍人は、近代日中関係において侵略の先駆けとなった。中国人は甚大な被害を受け、身に染みる苦しみを経験した。それ故に、「日本軍閥」という言葉は広く使われていて、中国人が日本を理解するための重要な概念の一つでもあった。現在、中国の歴史学界における「日本軍閥」に関する先行研究は多くないため、なお研究の余地がある。² 本論は概念史の手法を用い、中華民国時期（1912年～1949年）における「日本軍閥」に対する中国人の認識と批判について、簡単に紹介・分析する。近代日中関係史の研究に少しでも役に立てばと願っている。

一、「軍閥」から「日本軍閥」へ

中国の古典に「軍閥」という言葉があり、その多くは戦争で功績を立

1 陳紅民、浙江大学蒋介石と近代中国研究センター（浙江大学蒋介石与近代中国研究中心）教授兼主任。

2 「中国知網」（cnki.net）の検索結果によると、中国の学者によって関連研究の中でよく使われているのは、「日本軍国主義」、「日本帝国主義」、「日本侵略者」など、「日本軍閥」という言葉を使う文章は多くない。具体例として、下記の研究を上げる。

徐勇「近代中日両国軍閥政治現象及びその政治文化の比較」（《近代中日两国军阀政治现象及其政治文化比较》）『思想理論戦線』（《思想理论战线》）2022年第3期、徐勇「日本の軍部の政治化とファシズムの確立」（《日本的军部政治化与法西斯主义的确立》）『歴史研究』（《历史研究》）1988年第4期、陶海洋「近代日本軍閥による国内政党政治の破壊－『東方雑誌』の評論に基づく」（近代日本军阀破坏国内政党政治——基于〈东方杂志〉的述评）『江蘇師範大学学報（社会科学版）』（《江苏师范大学学报（社会科学版）》）2017年第4期、趙慶云（赵庆云）「「日本人民」と「軍閥政府」の弁析－済南事件以後中国新聞雑誌の世論より見た日本認識の一側面」（《“日本人民”与“军阀政府”的辨析——济南惨案后中国报刊舆论对日认识的一个侧面》）『五邑大学学報（社会科学版）』（《五邑大学学报（社会科学版）》）2007年第3期など。

てた軍人の経歴を指し、軍功を讃えるポジティブな言葉であった。³ 近代における「軍閥」の概念は、1880年代（明治初期）の日本に遡ることができる。また、明らかにマイナス的な意味が含まれている。日本人学者松下芳男は「軍閥」を下記のように定義した。「軍閥」は軍隊において、軍制の特権を利用し、私利を図るため国政に対して、違法な干渉をする派閥集団であり、政治を干渉し、権利を弄ぶことがその基本的な特徴である。⁴ 1916年袁世凱が亡くなった後、中国は軍人の派閥紛争に陥ったため、一部の知識人は日本の「軍閥」の概念を用い、国内の混乱を批判した。徐勇の研究によると、「軍閥」という言葉の使用は、五四運動以後明らかに増加し、1920年代に入るとさらに普及・流行していた。⁵ また、当時の中国の状況は日本と異なって、「軍閥」という概念が中国で普及する過程において、さらに対外的に帝国主義にすぎり付いて、対内的に規律を乱し、民衆を苦しめるなどの新しい要素が付け加えられ、マイナス的な意味しか残っていない言葉に成り果てた。

一方、「日本軍閥」という言葉もほぼ同じ時期に中国に導入され、中国の新聞・雑誌で見掛けるようになった。「全国新聞・雑誌索引サイト」（全国报刊网索引网）の検索結果によると、1919年から1949年までの中国新聞・雑誌に掲載された文章の中で、タイトルに「日本軍閥」が使われた文章は851件に及んだ。最初の2件は、1919年2月11日『民国日報』に掲載された楚倫（楚倫）の「日本軍閥派に問う」と3月21日『時報』に掲載された「日本、軍閥の廃除を実行」であった。1919年から1949年までの30年間に、中国の新聞・雑誌のタイトルに「日本軍閥」がある文章の統計は図一の通りである。

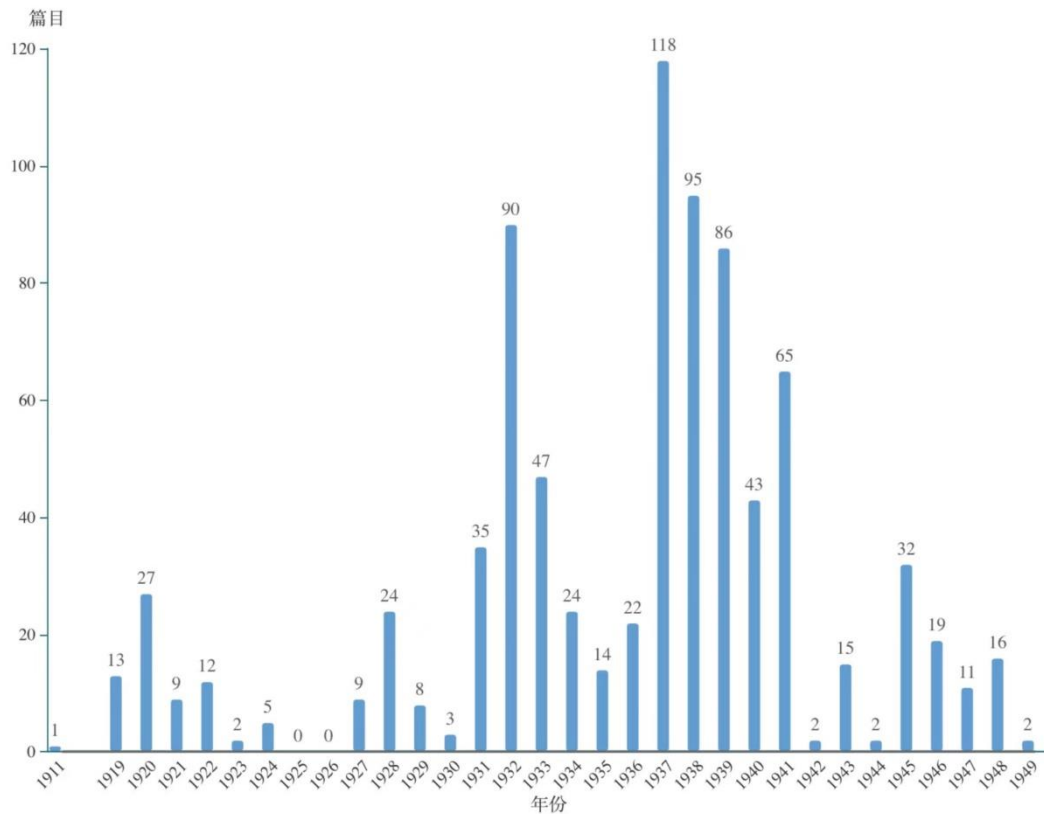
³ 謝蔚（谢蔚）「「軍閥」古義形成の分析」（《试析“军阀”古义的形成》）『歴史教学（高校版）』（《历史教学（高校版）》）2009年第1期。

⁴ 徐勇「近現代に於ける軍閥現象の政治文化についての分析－軍閥という概念が中国に輸入された原因を考えることを兼ねて」（《近现代军阀现象的政治文化分析——兼考军阀概念输入中国之成因》）『北京大学学法（哲学社会科学版）』（《北京大学学报（哲学社会科学版）》）1999年第5期、66頁。

⁵ 徐勇「近現代に於ける軍閥現象の政治文化についての分析－軍閥という概念が中国に輸入された原因を考えることを兼ねて」（《近现代军阀现象的政治文化分析——兼考军阀概念输入中国之成因》）『北京大学学法（哲学社会科学版）』（《北京大学学报（哲学社会科学版）》）1999年第5期、62頁。

図一 民国期中国新聞・雑誌文章の標題に「日本軍閥」が含まれる統計図

(出典：「全国新聞・雑誌索引サイト」(全国报刊索引网))



図一の集合縦棒グラフによると、民国期新聞・雑誌記事のタイトルに、比較的「日本軍閥」の頻度の高い時期は五つあり、いずれも中国に対する日本の軍事侵略の過程との関わりがある。第一、1919～1920年の間、第一次世界大戦終結の後に日中両国は山東問題をめぐり、緊張が高まった。第二、1928年に日本は北伐軍を掃討するため、済南事件を起こした。第三、1931～1933年に日本は満州事変を起こし、東北地方の占領に加え、戦場を華北までに広げた。第四、1937～1941年の間、日本は中国全土に対して侵略戦争を始めたが、日本の侵略に対して中国は孤軍奮闘した。第五、1945年に日本は降伏し、敗戦した。日本の戦争責任に対して、追求と清算を行われた。注目すべきは、1937～1941年の5年間、平均として毎年80件を超えた記事が数えられたが、1942年は前の年の65件より2件に急減し、1943年には15件があったが、1944年にまた2件しかなかった。換言すれば、3年間の平均として、毎年7件に至らず、同じ日中全

面戦争期にもかかわらず、「日本軍閥」の使われ方は何故これ程の差があるのだろうか。考えられる原因の一つは、1941年末の太平洋戦争の勃発であり、中国戦場も連合軍と共に戦うことで、日本に勝つ見込みが立ったため、中国人はもはや「日本軍閥」のような感情的な言葉を日本の軍隊に対する恨みと恐れの手掛かりにする必要がなくなったことである。

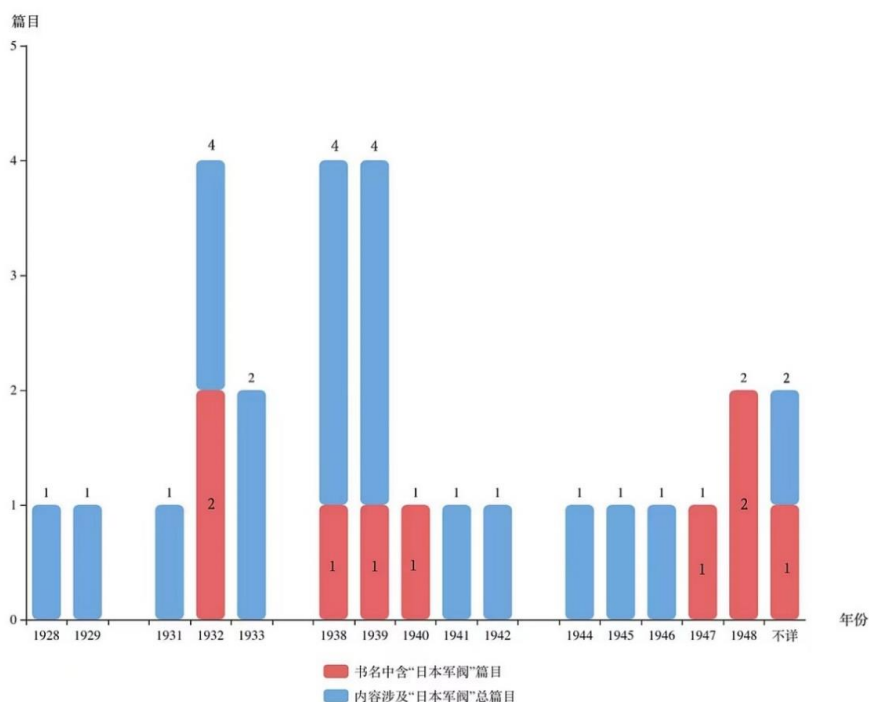
一方、民国期の書籍の場合、「日本軍閥」を書名または章・節のタイトルとして取り入れられた時期は新聞・雑誌と比べて、明らかに遅れていた。何故なら、新聞・雑誌は常に時効性のある「新しさ」を追求し、それに対して書籍のような出版物は滞留的な側面を持つからである。復旦大学図書館の竜向洋（龍向洋）研究員が主導する教育部人文社科規画項目（教育部人文社科规划项目）「民国時期図書目録データベース」

（民国时期图书目录资料库、中国主な図書館及び一部の海外図書館の中国語目録を収録している）の検索では⁶、民国期に出版された「日本軍閥」関連の著作は28冊（書名に「日本軍閥」があるのはそのうち9冊）であった。その中で、最も古いのは曹重三が書き1932年5月に萃斌閣から出版された『軍閥による政治干渉及びファシズム運動－対華強硬策（近時日本政治状況の変化）』（《对华硬化之军阀干政与法西斯运动（日本最近政情之演变）》）である。同年8月に、上海時事編訳社は日本人佐藤清勝著の『東北問題と日本軍閥の大陸政策』の中国語訳を出版した。1932年に出版された両書の書名に「日本軍閥」があった理由は、その前の年に日本は中国東北を侵略・占領したことと関わりがあると考えられる。また、1932～1933年に8冊、1938～1939年に6冊それぞれ「日本軍閥」に関する著作があり、ほかの時期と比べて、その数は明らかに多かった。こうした傾向は、基本的に新聞・雑誌と一致し、いずれも日本が中国侵略を拡大した後であった。

図二 民国期標題に「日本軍閥」と関連のある書籍統計図

（出典：竜向洋（龍向洋）主導「民国時期図書目録データベース」（民国时期图书目录资料库））

⁶ 現在、技術上では民国期全ての書籍に対し、全文検索を行なうことができず、一部の書籍を対象に書名から章・節などの目録まで検索することができる。



二、「日本軍閥」に対する中国人の認識とその運用

民国期、中国人が使っていた「日本軍閥」という言葉の意味合いは、現在より広義的であり、一般的には日本軍部・中国を侵略する日本軍またはより具体的に日本軍人・特に高い階級の軍人を指した。例えば、1927年上海の『時事新報』は「日本軍閥青島に到る」という見出しで、中国における日本軍の山梨半蔵大将のスケジュールを報道した。このマイナスのイメージしかない言葉を使った理由は、中国に対する日本の侵略の不当性を批判し、侵略が必ず失敗に終わると主張し、日本軍の暴挙などを暴露するためである。その中では、日本の社会構造に対し、学理的な検討も行われたが、その目的は、常に交錯しながら混合している。以下、簡単な例をいくつか取り上げたい。

(一) 日本軍閥の形成史及びその現状・派閥と人物などの研究を通し、敵を知り己（中国人）を知る。

1922年劉馥（刘馥）は著作「日本軍閥論」（《日本军阀论》）の執筆動機を説明した時に、次のように述べた。「日本軍閥は何故全国を支配できたか、如何なる方策を用い、内部に如何なる派閥があるか、その指導者が如何なる人物であろうか。吾輩は大いに研究したいところであり、

我が国民は研究せざるを得ないところでもあるなり。」⁷ 「日本軍閥論」は序論をはじめ、四章構成で、その内容に日本軍閥の由来（文化、憲法、官制、国防などの側面より観察）、日本軍閥の現状（陸海軍、政治、外交、元老、官僚、財閥、政党などとの関係）、日本軍閥の内容（陸軍閥、海軍閥、陸海軍閥の内外政略など）、日本軍閥の行く末などが含まれる。

7年後の1929年に、繆鳳林（繆凤林）が書いた同じ「日本軍閥論」

（《日本軍閥論》）というタイトルの文章は南京『史学雑誌』（《史学杂志》）に掲載された。繆の文章は序言・結論のほか、八節構成で、第2節から第6節は日本側の資料をまとめ、第7節から第9節は日本の資料に基づいて、整理・統合を試みた。⁸ 実際、当時中国のメディアによって、発表された日本軍閥の歴史及び特徴に関する分析の多くは、日本人の研究成果を参考にしている。

1935年『汗血週刊』（《汗血周刊》）に掲載された「日本軍閥と日本政治」（《日本軍閥与日本政治》）は、日本軍閥が日本政治の中で特殊な勢力に成長した理由について、下記の五つの原因があると指摘した。

1. 「憲法上所謂軍部と謂う者は、内閣と対立的な立場にあるから」、
2. 「軍部の大臣は武官制であるから」、
3. 「日本の内閣は天皇に対して責任があるが、国会に対してはない」から、
4. 日本の制度上の慣習として、何回も大臣を担当したことのある経験者でなければ、首相にはなれないため、軍人が組閣する機会が多いから、
5. 日本軍閥は「根強い基盤を築き上げた」から。1901年以後、20回を数える日本の内閣の中に、軍人が組閣した回数は10回に及ぶ。世界恐慌が発生してから、「日本の統治階層、有産階級及び地主たちは、日本帝国主義に於ける経済恐慌を打破するために、戦争が唯一の方法だと信じていた。彼らはもはや政党に対する信頼を失い、軍閥を信じ、軍閥こそがこの難しい任務を果たしてくれる存在であった」、それ故に、日本軍閥は日本政治に於ける絶対的な支配権を手に入れた。そして、文章の最後に、日本軍閥に対する中国人の認識が描かれた。

日本軍閥の政治的勢力は日に日に増長し、それに対し、我が中華民

⁷ 劉馥（刘馥）「日本軍閥論」（《日本軍閥論》）『国民外交雑誌』（《国民外交杂志》）第1巻第2期、6頁。

⁸ 繆鳳林（繆凤林）「日本軍閥論」（《日本軍閥論》）『史学雑誌』（南京）（《史学杂志》（南京））1929年第1巻第2期、2頁。

族は前途暗澹である。民族の復興、国難を打破するため、我々は強力的な政治統治のもとで、国防の強化に努め、日本軍閥の暴力に抵抗するしかない。⁹

この類の学術研究は穏やかな筆致で著され、文章も一般的に長文が多く、新聞・雑誌で連載する必要がある。また、その多くは1937年の盧溝橋事件・日中全面戦争前あるいは初期に発表されたものである。何故なら、日中関係が緊張していたものの、ある程度の関係維持は可能であり、メディアもまだ理性的な情報伝達が可能だったからである。

(二) 日本軍閥とその他の派閥・民衆との間の矛盾を摘発し、間接的に抗日軍民に肩を入れた。

満州事件直後、すでに日本軍閥と政府の間に矛盾があると分析した中国人がいた。日本軍閥は四面楚歌の局面に立ち、その立場は日々危うくなりつつあったため、対外戦争を策動し、中国の東北を侵略した。このような動きは、長い間対立している軍閥と政府との軋轢をさらに「深刻化」させ、中国東北の侵略をめぐる方針の相違が見られた。¹⁰

1937年8月日中は全面戦争に突入し、中国の新聞は対華方針をめぐる日本軍閥と政府の甚だしい矛盾を暴露し、「満州事変以来、日本の対華政策は軍閥の手の内に入れられた。盧溝橋事件勃発後、少壮派軍人の気焰は益々昂まった。」政府はただ既成事実を承認する以外為す術がなく、事前に自らの主張を出すこともできなかった。「この度、華北を蹂躪したことも、上海に増兵したことも、いずれも此輩の軍人の仕業で、彼らは個人の昇進または一攫千金の機会を図る。しかし、罪のない民衆は徴兵されたため、不平が満ち溢れている。膨大な軍事費の支出のせいで、破綻するのは時間の問題であり、日本に於けるかつてない危機が引き起こされた。また、日本政府の内部にすでに重大な亀裂があり、元老重臣はいずれも（海外進出・侵略を）を抑えて、経済の発展に重点を置くべしと主張した。」¹¹

⁹ 白鷗（白鷗）「日本軍閥と日本政治」（《日本軍閥与日本政治》）

『汗血週刊』（《汗血周刊》）1935年第4卷第11期、168～170頁。

¹⁰ 岩白「倭軍の東北侵略の動機」（《倭軍閥侵略东北之动机》）『日本評論』1931年第1期、8頁。

¹¹ 「日本軍閥横暴、日本政府内部に重大な亀裂」（《日本軍閥専横、日本政府内部发生重大裂痕》）『錫報』（《錫報》）1937年8月14日、第3版。

日本軍閥と政府との矛盾が指摘されると同時に、「日本軍閥－民衆」の二分法もよく中国のメディアに取り上げられた。余協中（余協中）は「日本軍閥と国民に告ぐ」（《向日本军阀和国民说几句话》）の中で、中国が徹底抗戦の決意を表明しながら、日本国民に対して中国を侵略している日本軍の残虐さを指摘し、軍閥に欺瞞されないよう訴えた。「もっとも望ましいのは日本国民が最大の努力を用い、軍閥の侵略行為を阻止することである」、中国の民衆と手を携え、「速やかに日本軍閥を打倒しよう」。¹²

（三）日本軍閥に対して警鐘を鳴らし、踏みとどまることを促す

中国のメディアも論理を通して日本軍閥集団に悟らせ、中国に対する侵略を中止してほしかった。

王芸生は日本が中国に対して全面戦争を仕掛けた直後に「日本軍閥を誡める」を発表し、次の三点において日本軍閥が行動を改めるよう真摯に戒告した。一、日本盛衰の歴史を振り返り、明治時代に至って、軍人はやっと「忠君愛国」の美德を取り戻し、大政奉還を成し遂げたため、「明治維新の基礎を築いた」。しかし、現在日本軍閥の行動は、まるで過去一千年間旧権力が犯した罪悪と禍害を繰り返したようで、さらに「個人の罪悪と国家に対する禍害は、旧幕府時代を越えるであろう」と指摘した。¹³ 二、日本の国家利益にとって、中国に対する全面的な侵略は「中国を否応なく闘う道を歩ませた」、またワシントン体制を破ったため、各国は「日本を仮想敵として」軍備を増強させた。日本軍閥は「必ず外に対して軽侮の端を発し、内に対しては崩壊の禍の如し」である。¹⁴ 三、世界の大勢から言えば、近来世界的な危機の大半は日本軍閥が「引き起こした」ものであり、日本軍閥はこのまま突っ走ったら、世界人類がいずれその災禍を受けることになる。また、最も先に滅ぶのは日本に間違いない」。そして、文末で日本軍閥に一つの選択肢を与えている。

日本軍閥よ！貴殿達は国の乱臣賊子・世界の公敵になることを甘受

¹² 余協中（余協中）「日本軍閥と国民に告ぐ」（《向日本军阀和国民说几句话》）『経世』1938年戦時特別号（戦時特刊）13、第9期。

¹³ 王芸生「日本軍閥を誡める」（《誡日本军阀》）『救亡文輯』（《救亡文輯》）1937年、38頁。

¹⁴ 王芸生「日本軍閥を誡める」（《誡日本军阀》）『救亡文輯』（《救亡文輯》）1937年、40頁。

すれば、倒行逆施の行動を続けてください。貴殿達の国家及び世界人類は公道を以て懲罰を与えるであろう。仮令（たとい）、貴方達はまだ少しの理性・感情を保っていれば、軍の先人達の歴史の為、国家国民の利益の為、世界人類の幸福の為、明治神宮の神祇の前で跪（ひざまず）き、貴方達が犯した罪を切に懺悔せよ！¹⁵

また、中国のメディアは海外有名人の言葉を借り、日本軍閥の中国侵略が支持されていないことを掲げた。1938年の『文摘』は「タゴール、日本軍閥を痛斥」（《泰戈尔痛斥日本军阀》）というタイトルの記事を掲載し、日本の中国侵略に対し、ノーベル賞受賞者のインド詩人タゴール（Rabindranath Tagore）の考え方を紹介した。タゴール曰く、曾て日本人を賞賛していたが、日本は完全に変わってしまった。「東方の無抵抗な民衆を酷く迫害し、その経済的な拡張及び領土的な野心よりも劣悪なのは、日々行っている惨殺などの暴行に対して、恥知らずに粉飾しようとしているところである」。¹⁶ 注目すべきは、本来、日本製品不買運動に反対するように求められたタゴールは、日本の中国に対する侵略行為に強い不満を抱いていることを理由として断ったという話だったにも関わらず、中国語のメディアは「日本軍閥を痛斥」というタイトルを用い、更に日本の不義を強調した。その他、中国の新聞・雑誌はノーベル文学賞受賞者のパール・S・バック（Pearl S. Buck）がアメリカで発表した文章「日本軍閥の心理」も訳し、日本軍人が無防備の中国都市及び民衆を襲撃したことを批判した。パール・S・バックは、日本軍閥の心理を蔑視し、日本軍閥の行為に反対し、「私は現在日本が中国で行なった行為を容認することを厳に拒否する」と主張した。¹⁷

（四）中国を侵略した日本の暴行を曝露するため

中国人が「日本軍閥」を使った主な目的は、中国に於ける日本軍の暴行を曝露するためである。日本軍が中国を侵略したような悪事を働いたのは、「日本軍閥」の主導に起因すると認識された。1928年7月『申報』は「日本軍閥は又乱を起こしに来た」というタイトルで、日本政府

¹⁵ 王芸生「日本軍閥を誡める」（《誡日本军阀》）『救亡文輯』（《救亡文輯》）1937年、40頁。

¹⁶ 「タゴール、日本軍閥を痛斥」（《泰戈尔痛斥日本军阀》）『文摘』1938年第12期、299頁。

¹⁷ パール・S・バック著、蔣学楷訳「日本軍閥の心理」（《日本军阀的心理》）『新文摘旬刊』1938年第1巻第4期、112頁。

は中国東北部の利益を維持するため、中国の統一を干渉し、中国に於ける軍事力を増強することを堅持した。¹⁸ 太平洋戦争勃発後、国民政府は日本に対して宣戦布告し、その冒頭に次のように書いている「日本軍閥は夙に亜細亜を征服すること、太平洋地域に君臨することを国策として」。 「日本軍閥」を侵略戦争の起源と見なした。¹⁹

「中国に於ける日本軍閥の罪惡記録」は、中国に対する日本の侵略を暴露する典型的な記事である。記事の中で、「ファシズムを掲げた日本賊軍は、中国で血腥い烙印を押し、彼等は自らの血を用いても洗い流すことはできない」と指摘し、日本軍統治下の中国経済が破綻したことを例として、「中国で最も栄えていた地域は悉く日本の占領下であり、これらの地域はどのような変化があったか。国民の生計全体から見ても、農村経済に焦点を絞っても、いずれも大きな変化がもたらされ、状況は悪くなる一方であり、半植民地より完全なる植民地に成り下がった。このような変化は、純然たる日本式の政策によるものであり、大規模な虐殺と略奪、迷信及びアヘン吸引の提唱・土地の没収・五穀及び労働力の徴用・煩雑且つ過重な税金及び役畜の労働力の破壊などの政策によるものであった。」²⁰ このような侵略及び略奪の前では、中国人は唯、侵略者である日本に対し、確固とした意思で対抗するしかない。

三、「日本軍閥」という概念について蒋介石の運用²¹

蒋介石はよく「軍閥」という概念を利用したが、彼の軍閥に関する言説の中に「日本軍閥」はとりわけ特殊且つ重要な存在である。筆者は蒋介石の言説を比較的にまとめた国民党の公式的な出版物『先總統蔣公思想言論總集』（《先总统蒋公思想言论总集》／計40卷）及びスタンフォード大学フーバー研究所図書館・文書館所蔵の「蒋介石日記」を比較分析し、「軍閥」という言葉の利用頻度のピークは日中全面戦争期（1937

¹⁸ 「日本軍閥は又乱を起こしに來た」（《日本軍閥又來搗亂》）『申報』（《申報》）1928年7月13日、2頁。

¹⁹ 「日本に対する国民党の宣戦布告原文」（《国民政府对日宣战原文》）『黨員知識』（《黨員知識》）1941年第1卷、2頁。

²⁰ 陶澤（陶澤）訳「中国に於ける日本軍閥の罪惡記録」（《日本軍閥在中国的罪惡记录》）『讀者』（《讀者》）1945年（号数及び刊行日に関する情報なし）

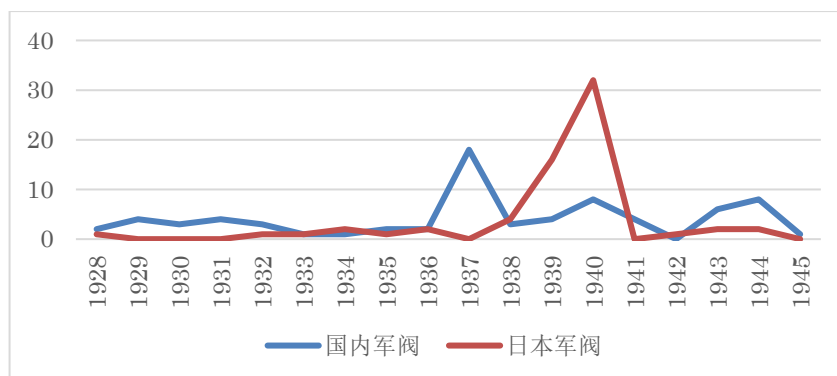
²¹ 筆者は「軍閥」という概念に対する蒋介石の認識を研究し、その成果を2022年の『軍事歴史研究』（《军事历史研究》）第4期で発表した。

～1945年）であり、その多くは「日本」と関係している。管見の限り、蔣が初めて「日本軍閥」という概念に言及したのは1928年5月「済南事件」の時であり、「軍閥」という概念より9年遅れた。²² この時、日本軍はあらゆる手段を講じ、（国民政府の）北伐を阻止しようとしていたため、蔣は極めて大きな挫折を感じ、「これ以上日中の仇を忘れることができず、其の軍閥の害は中国の軍閥よりも甚だしいもの也」と嘆いた。

23

若き頃の蒋介石は幾度の困難を乗り越え、日本留学が叶い、軍事に関する知識を習ったため、日本軍人の地位及びその軍事組織の訓練に対し、非常に憧れていた。しかし、日本の中国侵略は中華民族の利益に損害を与え、蒋介石の統治に対しても脅威を与えた。それ故に、蒋介石は内政を干渉し、対外的には侵略政策を実践している日本軍部とマイナス的な意味合いが強い「軍閥」という言葉と連結し、「日本軍閥」という用語を用い、日本の軍部勢力及び中国を侵略している日本軍のことを蔑称した。

図三「蒋介石日記」中、「軍閥」と「日本軍閥」の使用頻度（1928～1945年）



注：「日本軍閥」には「日閥」「敵閥」「倭閥」等の同義語も含む。

図三の通り、蔣が「日本軍閥」を一番頻繁に使ったのは1938～1940年であり、当時国民政府は最も繁栄している東部地域を失い、西南に撤退した。日本の侵略に対し、中国が孤軍奮闘していた最も困難な時期で

²² 蒋介石が初めて「軍閥」という言葉を使ったのは、1919年2月に「廢督裁兵議」（《廢督裁兵議》）を題とした孫文への建議書の時であった。

²³ 「蒋介石日記」（手稿本）1928年5月12日。

あった。蒋介石は「日本軍閥」という言葉を用い、侵略者への軍民の敵愾心を呼び起こし、抗日の士気を鼓舞した。一方、蔣は鬱憤ばらしに日記の中で中国を侵略している日本軍を罵倒した。これも中国メディアが「日本軍閥」を使用した頃合と一致している。

蒋介石は敵愾心を喚起するため、国内の軍民に対して宣伝した時に「日本軍閥」を痛罵した。満州事変の後、蒋介石は講演の時に「日本が東三省を占領したのは、東亜の平和を破壊する行為そのものであり、日本軍閥はそれを理解せず、自ら世界との関係を断つのと違わない。」²⁴ 中国軍民は最後まで日本軍閥に対抗せねばならぬ、「かの日本侵略者軍閥は東亜共栄圏をスローガンにし、亜細亜の併呑を実行し、太平洋地域を君臨する野望を持っている。正に我々が徹底的に対抗・排除しなければならぬ公敵である」。²⁵ 中国に於いて「軍閥」はマイナスかつ必ず失敗するというイメージを持っている。蔣は「日本軍閥」を利用し、国民の「軍閥」に対する様々な嫌悪感を、直接または間接的に日本の侵略者に付け加えようとした。

また、「二分法」を用い、「日本軍閥－国民」に対し、対立的な区別を行なうことは、蒋介石が強調した「日本軍閥」という概念の基本的な論理である。蔣から見れば、日本軍閥と民衆との関係は、「圧迫」と「圧迫される」ものであり、侵略を主張している軍閥は民衆の支持を得られず、果ては日本民衆が蹶起し、軍閥を覆すことさえある。それ故に、「特に注目すべきは、軍閥に対する（日本の）一般民衆の嫌悪感の程度である」と蔣は明確に指摘した。²⁶ 蒋介石が中国を侵略している日本軍の多くは軍閥に欺かれた一般民衆であり、教育を用いて日本軍捕虜を感化するように主張した。「特に一般の日本捕虜に対し、徹底的に覚悟させて、心より納得することができれば、本国の軍閥に対しても反対できるようになる。」²⁷ 日本国民と軍閥との対立を強調したほか、蔣は日本

²⁴ 蒋介石「公理を擁護し、強権に対抗する」（《拥护公理抗御强权》）1931年10月12日、『思想言論総集』（《思想言论总集》）10巻、472頁。

²⁵ 蒋介石「国民参政員に対する期待」（《对于国民参政员的期望》）1942年10月31日、『思想言論総集』（《思想言论总集》）19巻、354頁。

²⁶ 「蒋介石日記」（手稿本）1933年3月17日。

²⁷ 蒋介石「今日の教育及び体育に於ける注意すべき要点」（《今日教育与体育应注重之要点》）『思想言論総集』（《思想言论总集》）17巻、1940年10月13日、483頁。

政界に「文－武の対立」が存在していて、軍閥に対して文官も牽制効果があると主張した。「更に注目すべきは、日本内部に於ける文武両派の争いの勝者が誰かという問題である。文官を台頭させることによって、軍閥を牽制する。軍閥の横行を抑止することによって、その孤立を促す。」²⁸ また、蔣は日本軍閥の内部にも分岐および闘争があると考え、米内光政の組閣後「陸海両軍の暗闘は必ず深刻になり、文武新旧などの衝突も、必ず益々甚しくなり、帝国内部からの崩壊をもたらす。」²⁹ 日本軍閥が民衆に反対され、内外ともに抵抗に遭うのであれば、中国は持ちこたえ、日本と対抗し、日本軍閥を追いつめ、失敗に終わらせるのは必然の選択である。³⁰

更に、蒋介石は「日本軍閥」という概念を日本の民衆に対し、宣伝した時にも運用し、日本民衆が軍閥を覆すことに奮起してほしいと激励し期待した。1938年、蔣は対日全面戦争一周年の時に、「中国の敵は日本軍閥のみ」（《中国只向日本军阀打击》）というタイトルの「日本国民に告ぐ書」の中で、まず、日中両国は「兄弟之邦」（兄弟のような国）であり、本来「互いに親しく接し、睦み合い、共栄共存」すべきであったが、日本軍閥が中国に対し、侵略戦争を起こし、中国で行なった劣悪な暴行は、中国の民衆に甚大な被害をもたらしたと同時に、日本国民に対しても損失を与えた。膨大な軍事費用の負担のみならず、青壮年の兵士が中国で戦死し、帰らぬ人となり、夫の帰還を待つ若き妻が終に未亡人になる。これらの責任の所在は、狂妄な日本軍閥にあり、中国の抗戦は、固より自らを救うことであり、「亦、即ち諸君（日本）を救う所以」でもある。蒋介石は文書の末尾に下記のように述べた。

中国の抗戦は、唯自衛生存の為のみならず、実は日中両国の国民の未来永久の福祉を実現する為なのである。貴国の残虐な軍部は、唯中国の敵のみならず、実は亦た日本国民諸君の公敵でもある。中国は抗戦してから本日に至り、只日本軍閥のみを敵と見做し、日本国民諸君を以て敵と見做さず。……諸君は早く両国安危の至計を察す

²⁸ 「蒋介石日記」（手稿本）1934年11月27日。

²⁹ 「蒋介石日記」（手稿本）1940年1月20日、「先週の反省録」（上星期反省録）。

³⁰ 蒋介石「抗戦建国三周年記念米国民衆に告ぐ書」（《抗战建国三周年紀念告美国民众书》）1940年7月8日、『思想言論総集』（《思想言論总集》）31卷、188頁。

ることを切に望み、一致団結し、強暴な軍部によるあらゆる所爲を反対し、貴国国民の正義なる意思及び力量を發揮し、侵略政策の変更を促し、平和秩序を回復し、日中互いの親睦の深めあいを実現し、東亞に於ける永久の平和の基礎を築き上げよう。³¹

一年後、蔣は一万六千字にも及ぶ「抗戦建国二周年記念日本民衆に告ぐ書」を發表した。この文章は四つの部分に分かれている。「日本軍閥の欺瞞的宣伝を暴く」「日本軍閥の東アジア民族奴隷の罪惡を宣言する」「中国が抗戦必勝、建国必成の理由を説明する」と「結論」で、日本軍閥のさまざまな罪惡を詳しく述べている。蔣氏は文章の結末に、日本の民衆が自覚・団結し、正義の意志と力を發揮し、日本軍閥のあらゆる行為に反対する、という昨年の願いを重ねて表明した。³²

戦時中、世界各国に援助してもらうための国際宣伝の中、蒋介石はまた同じ「日本軍閥」という概念を用い、日本の侵略行為に対する各国の嫌惡及び中国の抗戦に対する同情と支援を喚起し、侵略の野望を抱いている日本軍閥は世界各国の共通の敵と強調し、日本の軍閥は中国を侵略する行為は、その「世界を征服するのは先に中国を征服しなければならない」の第一歩に過ぎない。もしそれが実現すれば、世界が必然的に災難に遭う。「日本の侵略は一日が続ければ、極東と世界の平和は一日も維持できない」。³³

「軍閥」という言葉に対し、日中両国の国民は、一般的にマイナス的なイメージを持っている。即ち軍閥は国家と民衆に災いをもたらす存在であり、蒋介石は日本軍部のことを「軍閥」と定義し、日本に向けた宣伝の時にも「軍閥」反対の旗印を掲げ、（中国）国内と同じ効果を得られると期待した。然るに、日本軍部の勢力は蔣が予想していたような急速な崩壊も、蔣が理解・期待していた日本国民との対立もなく、日本国民は蔣の宣伝に応え、自発的に「軍閥」に対して革命を起こすこともなかった。但し、彼が「日本軍閥」という概念を用い、内外に対して宣伝

³¹ 蒋介石「蔣委員長が日本国民に告ぐ書」（《蔣委员长告日本国民书》）、『申報』（《申報》）1938年7月7日、第2版。

³² 蒋介石「抗戦建国二周年記念日本民衆に告ぐ書」（《抗战建国二周年纪念告日本民众书》）1939年7月7日、『思想言論総集』（《思想言論总集》）卷31、77～101頁。

³³ 蒋介石「蔣委員長が世界友邦国に告ぐ書」（《蔣委员长告世界友邦书》）、『申報』（《申報》）1938年7月7日、第2版。

したような策略及びその方向性は正しいと言えよう。

四、「日本軍閥」という概念に対する孫文・毛沢東の運用

孫文の革命人生に於いて日本は重要な影響力を持ち、彼が率いた中国同盟会の成立と活躍の舞台は日本であり、多くの日本の友人を持ち、宋慶齡との結婚も日本で行われた。孫文が生きていた時に、日中関係は緊迫していたが、決裂までには至らなかった。また、日本軍人は中国に対する野心を常に剥き出していたため、孫文が日中友好を強調すると同時に、よく日本軍人の跋扈や中国を侵略することを批判し、その時、偶然ながら「日本軍閥」という言葉を使ったことがある。仏云（佛云）は1940年11月孫文生誕記念日に「総理、日本軍閥を論ず」（《总理论日本军阀》）というタイトルの短文を発表し、中に孫文が「日本軍閥」を使った二箇所の文書を取り上げた。孫文は宮崎滔天宛ての手紙に「今後吾が党の患いは、依然日本の軍閥政策にあり」と書いた。また、「実業計画」（《实业计划》）の中に、「日本は各戦争に於ける結果として、常に最も厚き報酬を手に入れた。それ故に、日本軍閥は戦事を最も利益のある事業と見做すのも無理がない。今、中国は既に覚醒し、日本が其の侵略政策を告げたくとも、中国人も亦た必ず其れを拒絶する」と記した。著者はこの短文を書いた目的として、「日本軍閥の打倒は、総理が一向に主張したこと」であり、此の際に革命精神を発揚し、日本軍閥を打倒することは、孫文生誕に対して最も良い記念であることを説明した。³⁴

中国共産党の指導者毛沢東も「日本軍閥」という概念を少し運用したことがある。1991年版の人民出版社『毛沢東選集』（四巻本）の全文検索によると、1949年10月前に、毛沢東は計五本の記事の中で、「日本軍閥」を9回使った。初出は1938年5月の「抗日ゲリラ戦争の戦略問題」（《抗日游击战争的战略问题》）という記事で2回使われた。そして、同月に発表された「持久戦を論ず」（《论持久战》）でも2回使われた。それから、1939年9月の「ソ連の利益と人類の利益は一致」（《苏联利益和人类利益的一致》）に1回、1944年4月の「学習と時局」（《学习和时局》）に3回、最後は日中戦争後の1946年8月の「米国記者アン

³⁴ 仏云（佛云）「総理、日本軍閥を論ず」（《总理论日本军阀》）『勝利』（《胜利》）1940年第31期（第104号）、1940年11月9日。文中の「白波滔天」は、「宮崎滔天」と思われる。

ナ・ルイーズ・ストロングとの談話」(《和美国记者安娜・路易斯・斯特朗的谈话》)に1回と数えられる。その他、1949年1月の「国民党反动政府に改めて中国地域侵略軍総司令官岡村寧次及び国民党内戦犯罪者の逮捕を命ずる件に関する中国共産党発言人の談話」(《中共发言人关于命令国民党反动政府重新逮捕前日本侵华军总司令冈村宁次和逮捕国民党内战罪犯的谈话》)の中で、毛沢東は「日本ファシズム軍閥」という言葉を使った。毛沢東が初めて「日本軍閥」を使った文書は下記の通りである。

日本帝国は基本的に二つの弱点を抱えていて、即ち兵力の不足及び異国との作戦である。更に、中国の実力に対する誤算及び日本軍閥内部の矛盾によって、誤った采配も数多くあった。例えば、漸進的な兵力の追加、戦略的な協同の欠如、進攻方向が明確ではない時期、作戦の遂行または包囲殲滅の好機を逸するなどは、三つ目の弱点とも言えよう。こうした兵力の不足(小国寡民、資源不足及び封建的帝国主義など)、異国との作戦(戦争の帝国主義性及び野蛮性など)、采配の不手際によって、日本軍閥は進攻戦及び外線作戦に於いては有利な立場に立ったが、その主導権は日々弱ってきた。³⁵

毛沢東が文章の中で日本の主張及び中国侵略を実行した組織・軍隊・将校に言及した時に、「日本軍閥」のほかに、よく使ったのは「日本帝国主義」「日本帝国主義者」「日本ファシズム」「日本侵略軍」「日本侵略者」など、中でも(多く使われたのは)「日本帝国主義」と「日本侵略者」の二つであった。また、注意すべきは、時期によって、毛沢東が使った用語は異なり、1935年12月の「日本帝国主義反対策略を論ず」(《论反对日本帝国主义的策略》)には、「日本帝国主義」が23箇所、「日本帝国主義者」が6箇所あった。一方、彼は10年後の1945年日中戦争勝利の前夜に発表した「連合政府を論ず」(《论联合政府》)の中には、「日本侵略者」が75箇所あったことに対し、「日本帝国主義」は登場しなかった。

中国に対する日本の侵略は甚大な被害をもたらしたため、人々はそれを思い出す度に、心の痛みが収まらない。それ故に、1945年日中戦争に戦勝し、日本が武装解除されてからも、中国人は比較的「日本軍閥」

³⁵ 『毛沢東選集』(《毛泽东选集》)第二卷、人民出版社(北京)、1991年版、410～411頁。

という言葉をよく使っていた。上述した図一の統計によると、中国の新聞などの媒体に掲載された記事名の中に「日本軍閥」が含まれているのは、1946年に19件、1947年に11件、1948年に16件、1949年に2件が数えられる。これらの記事の内容は、大まかに3種類に分けることができる。一、日本軍閥の中国侵略責任を追求し、日本の侵略罪を清算するもの、例えば「日本軍閥が犯した罪業」（《日本军阀所造罪孽》）（『新聞報』（《新聞報》）1945年12月19日）、「日本軍閥、中国を奴役」（《日本军阀奴役中国》）（重慶『益世報』（重慶版）1946年8月21日）など。二、日本軍閥の懲罰を求めるもの、例えば「日本軍閥の末路 また新たな戦犯たちの入獄」（《日本军阀的末日 又一批新战犯入狱》）（『江蘇民報』（《江苏民报》）1945年12月4日）、「日本好戦軍閥の清算、昨日起訴書を正式的に提出」（《清算日本黷武军阀起诉书昨正式提出》）（『前線日報』（《前线日报》）1946年4月30日）。三、日本軍閥の復活を防止するためのもの、例えば、「日本軍閥再起の予防」（《预防日本军阀复起》）（重慶『中央日報』（《中央日报》）1945年9月3日）、「旧日本軍閥、再起を図る」（《旧日本军阀图再起》）（『中央日報』（《中央日报》）1947年10月23日）などがある。

■ 陳紅民（CHEN, Hongmin）

山東省泰安市出身。歴史学博士（南京大学中国近現代史専攻）。浙江大学求是特聘教授。蔣介石と近代中国研究センター主任。博士課程指導教員。浙江省歴史学会副会長。1985年から2006年までは南京大学歴史学部（助教、講師、副教授、教授）、南京大学中華民国史研究センター副主任を務めた。2006年から現在に至って、浙江大学歴史学部（歴史研究科）に勤める。歴史学部主任、中国近現代史研究所所長を務めた。専攻は中華民国史、蔣介石と近代中国。『美国哈佛大学哈佛燕京図書館蔵蔣廷黻資料』など学術著書30点余りを出版。学術論文は150本余りを掲載。研究成果は省と国家教育部レベルの奨励に複数受賞。アメリカ、イギリス、イタリア、オーストラリア、日本、韓国などの国や、香港、マカオ、台湾などの地域で学術交流を行った。

主な著作：「台湾時期蔣介石与陳誠關係探微（1949 - 1965）」、『近代史研究』、2013年第2号。「政治判断与抉择：蔣介石与毛沢東在抗戰勝利前後」、『澳門理工学報（人文社会科学版）』、2015年第4号。『『向導』

週報与中共早期国民党左派、右派概念的建構」(胡馨儀と共著)、『学術界』、2022年第4号。